

柳宗悦の平和観

—「無対辞文化」を中心に—

李空玄<東京大学博士課程>

1. はじめに
2. 「無対辞」の不二性
3. 「無対辞文化」—平和理念の実践
4. 結論

<論文要旨>

柳宗悦(1889-1961)の業績は、おおそ宗教哲学、民芸運動、仏教美学の領域に整理でき、従来の柳研究もそれらの角度から積みあげられてきた。彼にとってこれらは必然に不可分の諸課題だった。が、それらは最終的には「無対辞文化」(1961)という独自の平和思想を提唱することにある。本論は彼の「無対辞文化」に注目し、それが表象する平和観の核心を探求することを目的としたものである。彼は早くも1913年頃から「二元」の対立を超越する問題を考え始め、1917年には「無対辞」の境地を意味する「不二」を言及し、1948年には仏教経典『大無量寿経』中の「無有好醜の願」に依拠し、その思想を確約するようになる。戦後には「不二」という用語に東西の宗教用語の枠を超える「無対辞」という新語をつける。彼は「無対辞文化」を提唱することによって、この世の相克する凡ての対象を超越する平和観の根源を模索したといえる。

<paper summary>

The achievements about Muneyoshi Yanagi (1889-1961) have been generally accumulated from an angle called religion philosophy, a folk craft

movement, and Buddhism aesthetics. This deployment was a necessarily indivisible proposition for him. However, it comes for it to advocate the original peace thought "A Culture Devoid of Antithesis" (1961), finally. A main subject aims at searching for the important part of the peace view in which it carries out representation paying attention to his "A Culture Devoid of Antithesis." Already, he begins to consider the problem which conquers a "duality" confrontation from 1913 age, makes reference in "Huni" who means the fresh ground of "A Culture Devoid of Antithesis" in 1917, will be based on "Non possession good scurvy prayer" in the Buddhism Buddhist scripture "Large Unmeasured Sutra" in 1948, and will come to promise the thought positively. The new word "A Culture Devoid of Antithesis" exceeding the frame of the religion term of east and west is attached to the term "Huni" at the postwar period. By advocating "A Culture Devoid of Antithesis", he can say that he groped for the origin of the peace view which transcends all the objects with which this world is in discord.

1. はじめに

柳宗悦(1889-1961)は、明治に生まれ、大正、昭和にかけての近代日本を生き、「美の宗教」¹という独自の宗教観を示した知識人である。彼は始め、雑誌『白樺』の活動を通して西洋文化についての研究を行っていたが、ある時より東洋文化に回帰し、それ以来、古今東西の宗教の根本思想を探りながら『民芸』運動を展開し、「美の宗教」という独自の思想展開をみせていった。

近代日本という激変の時期に彼は東洋と西洋、日本と朝鮮、仏教とキリスト教、民芸運動の思索と行動などの展開における二元の問題に向き合って、彼なりに答を模索したのである。その結果、彼は異質な価値を持つものに対して効

¹ 柳宗悦「美の宗教」『在家仏教』第12号(昭和30年3月発行)、『柳宗悦全集』第18巻、64頁。

率や力の強弱によってとらわれず、普遍性を持つ宗教理念(=不二)によって把握し、そこから一層創造的なものを生み出そうとしてきたのである。

彼に関する先行研究は『民芸』、仏教美学といった諸々の領域に及んで論じられている。しかし、最近では彼の思想と文化運動を、植民地時代の日本人という閉鎖的な枠を超えて再解釈するべきだという論議も目立ってきている。そのなか、柳の思想展開の基盤となるはずの宗教に関する研究は、諸研究に比べ量的にも未だ非常に乏しい状況にある。本論ではこの観点を問題意識に入れる。こうした彼の宗教観の展開を探究することによって近現代を問わず異質なものの対立をどう共生させるかという平和問題の解決に近づく重要な手がかりを示すことができるのではないだろうか。

本論は彼のこうした思想が集約された晩年の「無対辞文化」(1961)²に目を向けることによって、「二元」の対立を貫く普遍的な宗教性(=不二)の由来に注目し、それが表象する平和観の核心を探ることを目的とする。

2. 「無対辞」の不二性

柳がとらえている「無対辞」とは何を指すのか。彼は早くも1913年頃から「二元」の対立を超越する問題³を考え始め、1917年には「無対辞」の境地を意味

² 柳宗悦「無対辞文化」は『心』第14巻第4号(昭和36年4月1日発行)に寄稿したが、改訂し『民芸』第109号(昭和37年1月1日発行)、第110号(同2月1日発行)、第111号(同3月1日発行)に(上)(中)(下)に分け、(遺稿)として再録してある。『柳宗悦全集』第19巻、901頁。

³ 1913年より1923年の関東大震災まで柳は、宗教哲学の著述に集中している。柳はまず、哲学著述書を書き、哲学に関する自らの探究方法を明らかにしようとする。そして、その方法によってブレイクという思想家に関する長い研究を進める一方、1916年から東洋の宗教哲学に関する理論を展開している。それは、西欧文化と思想を中心に紹介していた柳にとって大きな変化であったと分析される。こうした変化には、当時の日本社会に表面化された上層階級の西洋崇拜あるいは西洋の模倣に対する社会批評の一面が考えられる。大正期に入ると、思想界の知識人を中心に西洋の模倣から独立的なものを日本人自らの手で生みだそうとする変化が表した。南博『大正文化』劉草書房、1965年、

する「不二」に言及し、戦後1961年には「不二」という用語に東西の宗教用語の枠を超える「無対辞」という新語まで作り出した。これは生涯に渡って展開してきた不二論を「無対辞」によって総合しようとする試みである。

『対辞』(Anti-thesis)とは、『相対する言辞』^{*}の意であるから、『無対辞』とは、反面に相対する言辞のないことを意味する。つまり『対立概念を持たない言葉』と解してくださってよい。……解答を与えようとするのが、東洋の宗教思想の一般的特色なのである。⁴

柳にとって人間は知る生物である限り、相対概念すなわち二元の相から離れることは不可能である。知る事は分けることであり、分けることは互いに反することであり、両者のなかの一方を選び他方を捨てることになる。ここから苦しみや争いが生まれ、相克する対辞の世界においては平和も困難になるとみた。このような対立相克から何があれば離脱する可能性を得られるのか。彼は『そのまま』、何ものも未だ二つに分れていない『もとのまま』の姿を示唆することであると思った。それゆえ、彼は対立相克の離脱の言葉に注目し、「不二」、「未分」という宗教思想の根源を探究し、「無対辞」⁵という独自の言葉を提唱するようになったのである。

柳のこうした無対辞観を形成していく過程には、近代日本の哲学のうちその基礎、ないし背景に禅があると認められる西田幾多郎や、禅思想家として知られている鈴木大拙の影響⁶が考えられる。鈴木は「東洋としては二分性の徹底を学ばなくてはならぬ」「二分は絶対ではない」と「入不二法門」(維摩経)による不二思想を禅思想(無分別の分別)における一貫した根本思想と示した⁷。

また、西田は「色を見、音を聞く刹那、未だ主もなく客もない」ところを「純

155-158頁。

⁴ 「無大辞文化」、712-713頁。

⁵ 「無対辞文化」、718-719頁。

⁶ 柳が学習院に在学している時、西田幾多郎はドイツ語先生として、鈴木大拙は英語の先生として勤めていた。とくに大拙とは長期的な影響が柳にあったと考えられる。

⁷ 上田閑照「鈴木大拙における「東洋的な見方」」(『新編 東洋的な見方』)、171-176頁。

粹経験」の出発であるとき、「純粹経験」が自発自展して全展開したところ、そこが宗教であるととらえた。宗教というものが「哲学上での議論ではなくして、実在における心霊的経験の事実である」⁸。「宗教は心霊上の事実である。哲学者が自己の体系の上から宗教を捏造すべきではない。哲学者はこの心霊上の事実を説明しなければならない」⁹と宗教を哲学の内のこととするのではなく、逆に宗教が哲学の完結になるとした。

柳は1919年『宗教としての真理』¹⁰、1921年『宗教的奇跡』¹¹、1922年『宗教の理解』¹²、1923年『神に就いて』¹³という宗教哲学に関する本を出版し、「神の理解」、「宗教的真理の本質」、「宗教の究極性」など宗教の本質、真理そのものの探究を行なっている。そして、「神」という絶対なるものは凡ての二元的な対立を超越したものである¹⁴と明らかにする。彼にとって二元の対立を超える

⁸ 西田幾多郎『善の研究』岩波文庫、1950年、232頁。

⁹ 西田幾多郎『場所的論理と宗教的世界観』『西田幾多郎全集』第11巻、1988年、371頁。

¹⁰ 柳宗悦は最初の宗教哲学論集1919年2月27日叢文閣より刊行、同年4月8日第2版を刊行した。内容では、「宗教的『無』」、「『無為』に就いて」、「『中』に就いて」、「種々なる宗教的否定」、「宗教的時間」、「『無限』の意味について」、「自我に就いての二三の反省」、「規範と経験」、「宗教的究竟語」、「即如」、「個人的宗教に就いて」、「神秘道への変明」、「神に関する知識」が書いている。

¹¹ 1921年1月28日、叢文閣より刊行。柳の宗教哲学第2論文集である。内容では「奇跡への非難と変護」、「奇跡の宗教的意味」、「四福音書に録されたイエスの奇跡」が書いている。

¹² 1922年11月21日、叢文閣より刊行。直ちに版を重ねて、1923年4月25日刊行の第4版に至る。1910年より1922年の間に『白樺』その他に発表した論考を筆を加えて一冊にまとめた論集。内容では「存在の宗教的意味」、「神の存在」、「全一なる神」、「神の理解」、「未来の宗教哲学」、「現代の宗教哲学における種々なる疑問」、「宗教的真理の本質」、「宗教の究竟性」が書いている。

¹³ 1923年7月5日、大阪毎日新聞社より刊行。1949年6月30日に至り、西村書店より『神について』と表記も改めた新版が刊行された。内容では、「神の懷疑に就いて」、「神の理解に就いて」、「神自らと彼の神秘に就いて」、「神への信仰に就いて」、「神と吾々との関係に就いて」、「神の愛と救いとに就いて」が書いている。

¹⁴ 柳宗悦「宗教的『無』」『白樺』第8巻第3号（大正6年3月発行）、『柳宗悦全集』第2巻、14頁。

宗教的真理が全展開を貫いて表現される全一体、それが「神(仏)」なのである。柳がいう宗教的真理(不二)から表現される「無対辞」の実体、神(仏)は全一体的な統合性を持つものである。それで、「どんな宗派も『不二(無対辞)』を理念としないものはない」¹⁵。ここで柳はキリスト教と仏教への共通理解を引いたり、大乘仏教の中での念仏と禅への共通理解をなして重なっていくのである。

こうした「無対辞」の境地に柳は『知性』よりも『直観』が主な働きとなっている¹⁶と強調している。柳にとって「直観」というものを思想展開上に考えさせたのはイギリスの神秘思想家ウィリアム・ブレイク¹⁷である。ブレイクの「悪をも肯定する、あらゆる存在を肯定する、この世には否定されるべきものは何一つない」¹⁸という、天国と共に地獄をも賛美したブレイクの思想は、二元性を相互依存的にみる価値基準になった。

¹⁵ 「無対辞文化」、729頁。

¹⁶ 「無対辞文化」、714頁。

¹⁷ William Blake(1757-1827)は、情感豊かな抒情詩と神話的構造をもつ叙事詩(預言書)を数多く残したロマン派詩人として知られる。ロンドンの靴下商人子として生れた。小さいときからよく幻覚を見た。正規の教育は受けず、母から読み書きを教わり、14歳のときに彫刻師バザリアの弟子となり、7年後には鉄板画家として独立し、本や雑誌の挿絵を彫版して生計を立てた。父の影響もあり、神秘思想家スウェーデンボルグの影響を大きく受けた。ブレイクは貧窮のうちに69歳で亡くなったが、彼の詩と絵画とが合体した総合芸術は、後世に大きな影響を与えた。また彼は、特異の<宇宙観>を作品に投影させていた。彼は<伝統>からは何の影響も受けない<幻視家>であったとの見方が長い間通用していたが、彼の詩を読む者に、詩に添えられた挿絵を見る者に、強烈な印象を残している。銅板画と詩の組み合わせた作品に、『無垢の歌』『経験の歌』がある。柳は1906年の学習院中等科在学中、同級生であった郡虎彦の薦めによって「無垢の歌」を読んだ。さらに三年後、バーナード・リーチの薦めによって『ブレイク詩集』(詩文文庫版、1905年)を読み、1914年には『キリアム・ブレイク』という大著を脱稿している。これは日本で書かれたブレイクに関する最初の論考であり、イギリス本国におけるブレイク研究にも増して本格的な大著であった。また1921年には『ブレイクの言葉』を出版、雑誌『ブレイクとホイットマン』も刊行した。(由良君美「解説柳宗悦の始発駅『キリアム・ブレイク』」、『柳宗悦全集』第4巻679-707頁。)

¹⁸ 柳宗悦「思想家としてのブレイク」『柳宗悦全集』第4巻358頁。(『三田文学』の求めによって執筆したが、発表を拒絶した。)

「在来の宗教によれば、此世界は天国と地獄とに分れ、此人性は精神と肉体とに分れ、吾等の行為は善と悪とに分かれている。然し一切のものに永遠の生命を感じた彼にとって此二元的思想は事実の反対を告げている」¹⁹

柳によればその価値基準とも言えるブレイク思想の核心は「想像」の概念であるという。「想像」の世界とは、自我と自然、心と物が互いに触れ合って渾然として一つになった時、そこに出現する純粋な生命の価値的世界、すなわち実在の世界、云い換えれば神の世界である。「想像の生活とは自己と神との直接合一」、「靈感を求めての自然な生命の衝動は知性ではなく直観である」²⁰と「想像」より「直観」の価値を果たすようになる。こうした若き時代からの直観の理解は東洋の宗教思想の境地を深めていくのに重要な手がかりとなっている。

「想像の生活とは自己と神との直接合一だった。彼の宗教的思想の核心は、いつも茲に集まっている。自我と自然と、心と物とが互いに触れて両者が漠然とした一つの価値的事実に移る時、そこに実在の世界、云い換えれば神の世界が現れる。……ブレイクは彼の芸術的経験によって此真理を明瞭に指摘している。直観とは実在の直接経験である。……ブレイク自らの切実な経験である此直観の観念が彼の『想像』又は『幻像』の思想と密接な関係がある事は自明である」²¹

それゆえ、直観の主な働きを強調した柳は、論考「無対辞文化」に「不二に居る」の境地を「只麼」によって用いている。柳にとって普遍的な真理、神(仏)は知識によって解ける問いではない。主体によって相対化された神(仏)は、神(仏)に関する知識であり、神(仏)のままに抱く絶対的なものではない。もし、それが可能であったとしてもそれは絶言絶慮、自他俱忘である²²。無対辞の神(仏)を開悟(覚)するためには、エックハルトの「沈黙」、「維摩経」の維摩の沈黙、禅家の「不立文字」・「言語道断」といった本質に直接に体験する「只」の境地が

¹⁹ 「キリアム・ブレイク」、358頁。

²⁰ 「思想家としてのブレイク」、305頁。

²¹ 「キリアム・ブレイク」、21-300頁。

²² 柳宗悦「即如の種々なる理解道」『白樺』第9巻第9-12号(大正7年9月-12月発行)、『柳宗悦全集』第2巻319頁。

必要である。

『維摩経』を読むと其の『不二の法門品』に『維摩の沈黙』の話が出てきて、古来甚だ有名であるが、それが『雷の如き沈黙』と評されてきたのもその『黙』が無対辞の黙を示す。……『不二』とは畢竟『無対辞』の世界を示すに外ならないのである。『不二』を『一』と云ってもよいが、『一』には尚且つ『二』とか『多』とかの対辞があるので、一切の二元に終らぬものを示唆しようとして、仮に之を否定的に『不二』(『二』ならず)と云ったのである。²³

ところで、「神(仏)に帰るのが無対辞の意味であり、此刹那こそ言葉もなく只の境地」であれば、只の境地は『否々』と止み難く反復し、『非々』たりとのみ」と相対性を超える自覚に否定作用を行なうことである。彼は『金剛経』に見出される論法、『甲は甲ではない、之を甲と名づける』²⁴を例とし、否定作用によって自分自身の本質を顕現するのが無対辞の顕現だとみた。無対辞は存在の根本であるがそれを根本的に否定することによってのみ本質的な存在となる。神(仏)は「至善」である。「善ならず又悪ならず」と言われる。すなわちそれはいかなる意味でも、実体的・対象的な存在にはならない。それで、柳は「無対辞」思想を主とする東洋思想では「煩惱即菩提」、「不生不灭」、「不善不悪」などの否定される表現が多いと論じ、それは矛盾されているようにみえるが、最も調和を求める融通的な真理的表現であると論じている。

3. 「無対辞文化」―平和理念の実践

柳は「無対辞理念こそは、一切の文化の基礎であってこそよくはないか。この理念こそは凡ての文化を、究極の方向へと導くもの」²⁵であると述べている。「無対辞」の理念が平和の核心を探ることだとすれば「無対辞文化」とは平和

²³ 「無対辞文化」、719-724頁。

²⁴ 「無対辞文化」、714頁。

²⁵ 「無対辞文化」、723頁。

を实践させる提案に繋がるものになるだろう。実際、柳は死を向える一年前に「無対辞文化」を書きあげた。そこには「強弱」「勝負」などの対辞に左右されない宗教人のあり方や、それによって得られる安心な生活、そして平和な世界観といった彼のヴィジョンが詳しく述べられている。

柳にとって不二の「無対辞」が表す直観というのは人間の開覚(悟)を惹起させる働く力である。この観点はいずれも柳が宗教を理解するのに既成教団や宗派を重く捉えるより、「無対辞」を起す人間の心にヴィジョンを抱くことである。すべての人間は神(仏)となる神性(仏性)を持っている存在なので、その人間に神(仏)と完全に合一できる生をおくらせるのが次第に柳にとって最も重要な問題となってきたと思われる。しかし、彼がこうした思想展開を行なっていくには大きな時代難問が置かれていた。柳は日露戦争時に15-16歳、第一次世界大戦の頃には25-29歳で、その戦期にかけて思想を形成したといつてよい。特に彼が思想家として本格的に活動するのは、1910年雑誌『白樺』同人としてであり、彼にとっては日露戦争後が思想の出発点となったと考えられる。しかしこの時代の日本人のほとんどは、ナショナリズムが強まるにしたがって国家のために生きることを理想としていたといえるだろう。にもかかわらず、柳は人間の心にヴィジョンを抱く不二の「無対辞」論を形成されていくことによって、近代産業(経済)や軍事(政治)を退け、宗教や芸術の領域に限定して、日本人の神性(仏性)を見出そうとしてきた。

こうした彼の行動には朝鮮の民衆芸術との出会いが大きく左右されているのが特徴である。彼は名も無き朝鮮の民衆(初期の表現では人々)が宗教的信仰心を込めて作り出した壺は不二の美を表現している²⁶と自覚した。これは人間の直観による働きは宗教的な信仰心であり、芸術的な想像力でも得られるという事件であった。彼にとってこうした朝鮮民族の名も無き民衆芸術との出会いは、近代の知識人(二元的思惟を行うエリート)と差異化される民衆という存在に気付くものになり、民衆(人々)がその時代の宗教的色彩を強く表したのが民族文化で

²⁶ 柳宗悦「朝鮮陶磁器の特質」『白樺』第13巻第9号別冊、大正11年9月1日発行。
『柳宗悦全集』第6巻、156-157頁。

あるという認識を示すようになった²⁷。

これは共に彼によって世俗的な国家との距離を置く結果を呼んだ。柳にとって「無対辞」な人間の心は日本人に限るものではなかった。彼は朝鮮民族の独自の文化がある限り、その民族文化を抹殺する日本の沈略戦争は愚かなものであると徹底的に批判²⁸した。柳は「野に咲く多くの異なる花は野の美を傷めるであらうか。互は互を助けて世界を単調から複合の美に彩るのである」²⁹という多角的な立場にたつ相互依存的な国家関係をとる。柳のこうした観点は当時「国体」論が進んでいく日本の政策に反するものでアジアの諸民族の独自性を主張するものになる。こうした行動は当時の日本の知識人とは異なるものであった。特に彼の恩師鈴木大拙がヴィクトリアの書『禅と戦争』で指摘³⁰されたように『新宗教論』におけるきわめて戦争肯定の論理をみせていくこととは大きく反するものであった。

なおかつ、彼は宗教的真理の探究から得られた不二の「無対辞」論を世俗的な国家観においても力の強によって弱なものを「一色」にする対辞の原理として捉えなかった。彼は諸国が「異質的な創造力を持つ自由性」を発揮することによって「互は互を助けて世界を単調から複合の美」³¹へと導くのだとの相対を超える論理として理解した。これは、当時のある思想家等が宗教絶対の原理を持って「大東亜共栄圏構想」を支持する展開をみせたこととは異なる行動で、

²⁷ 柳宗悦「朝鮮民族美術展覧会に就いて」『読売新聞』(大正10年5月9日)の紙面と『白樺』第12巻第5号(大正10年5月1日)に寄稿、『柳宗悦全集』第6巻、86頁。

²⁸ 柳宗悦「朝鮮の友に贈る書」(『朝鮮とその芸術』)、『柳宗悦全集』第6巻、23-24頁。

²⁹ 柳宗悦「宗教とその真理」『柳宗悦全集』第2巻、6頁。(『宗教とその真理』叢文閣、1921年)『白樺』及び『帝国文学』に発表してきた神秘道に関する論文を、各篇冒頭にそれぞれふさわしい経句や偈や詩句を付し、一冊に編んだ、柳宗悦の最初の宗教哲学論集に載せている。

³⁰ Brian Victoria: *Zen at War*, Weatherhill, 1997, 邦訳エミー・ルーズ・モザモト訳『禅と戦争』光人社、2001年。ただし、この日本語訳はきわめて問題の多いものである(西井公成『駒沢短期大学仏教論集』7、2001年、末本文美士「内への沈黙は他者へ向かいうるか—明治後期仏教思想の提起する問題—」『思想』岩波書店、2002年11月を参照。)

³¹ 「宗教とその真理」、6頁。

彼はアジアの諸民族文化を日本中心の「一」にするのは正しくないとみ、それぞれが独自の文化を持つ一民族としてその「存在理由」をはきだす関係形成を最も重要視したと評価される³²。

また彼のこうした観点は、軍国主義による日本の量的な膨張より、日本民族の存在理由を問うべき行動を伴う。すなわち、彼はアジアやヨーロッパの諸国と比べられるもう一つの民族としての日本文化を引き出すのが自国の存在を表すのに何よりも先行課題であると考えたのである。その結果、彼は『日本民藝館』をつくり、新たな日本の民族文化の発掘を行なう民芸運動を展開するようになった。彼のこうした足跡は論考「無対辞文化」において具体的に総合されたのである。

彼は「無対辞文化」とは「宗教的な人達の信心生活」で得られる極めて「安心な生活」であると述べた。柳が日本全国に渡って発掘した民族の特色とされるものは「木喰仏」³³と「妙好人」の行績が目立つものである。これは日本民族の宗教思想の底を大乘仏教、特に浄土系思想に置く研究成果を引いた。したがって、彼は当時軍国主義と深く繋がっている日蓮主義や国家神道は徹底的に排除した³⁴。特に、彼が主な興味をみせたのは「妙好人」の研究であった。「妙好人」とは浄土宗篤信者を指す、これは白蓮華という言葉に由来し、泥の中から汚されずに淨い花を咲かす蓮華のように、淨い心を持った人を意味する。彼は「妙好人」を「安心」を得た人間観として示している。柳は「無対辞」は知性より直観によって得られるものであると重んじ、それは開悟・否定・沈黙など

³² 柳宗悦「仏教に帰る」『現代仏教講座』第4巻、角川書店、1956年。（『柳宗悦全集』第19巻、501頁。）

³³ 木喰(1718-1810)は江戸時代後半期に生きた遊行の聖とも言うべき宗教者である。甲斐国の山村に生まれたが、22歳の時出家し、45歳の時木喰戒をうけて木喰行動と名乗り、廻国の行を發願したが、旅立ったのは56歳の時であった。以後93歳で没するまで66カ国を隈なく歩き通し、その間に千体を越える個性的な木彫仏を残すという、強靱な意志と身体に支えられた、強烈な贖罪の人生を送った。この廻国と作仏の人生は、彼自身と旅を支えてくれた民衆との滅罪を願うためのものであり、彼は民衆レベルの仏教信仰を共に生き、民衆に向けられた宗教実践に生涯を捧げたということがいえる。

³⁴ 柳宗悦「蒐集物語」『蒐集物語』、中央公論社、1957年。（『柳宗悦全集』第16巻、617-664頁。）

によって得られるとみた。柳によれば「学問のある者、主義のある者」は、とかく知識や概念にとらわれて不自由になるが、「妙好人にはこの汚れがなく、もっと端的で、至純で信心がまるまるとあらわれている」³⁵と考察した。もしも芸術の分野で、知識のない工人から日常的な、優れた美が作り出すなら、宗教の分野においては、「無学で平凡な人間が無常の信心を得て、大した暮らしに入る」と「妙好人」を評価し「民衆を代表する者」³⁶としたのである。なおかつ柳がたどり着いた「妙好人」という存在は相対する二元の苦悩や不安を、ただ仏を信じることによって乗り越え「安心」に入った宗教人なのだ。その結果、柳は「妙好人」によってアジアの諸国と比べさせる日本独自の仏教修行者の姿を提示することができたと予測される。

ところで、彼は前術に「どんな宗派も「不二」(無対辞)を理念としないものはない」という原理によって、キリスト教と仏教への共通理解を引いたり、大乘仏教の中での念仏と禅への共通理解をなしていた。それと伴う方法で、柳は「無対辞人」の姿を「煩悩を断ぜずして涅槃を証す」禅者の下で、また「対辞の根を切る」妙好人の姿で同時に述べる方法をとっている。彼は、他力に出発したとはいえ、戦後の仏教研究を、究極的にはこの無対辞=不二に立脚させようとしていった。彼は自力門の禅者が開悟(覚)を体得する瞬間と、他力門の妙好人が仏の絶対他力に入る瞬間とが結局には同一の「無対辞」を体得する瞬間で調和されることを示している。煩悩や妄想などの不安から安心を得られる宗教生活は、自力門でも得られるし、他力門でも得られるというのが彼が示そうとした宗教生活であったと思われる。こうした論理は大乘仏教に限らず論考「無対辞文化」の最後の文章ではキリスト教の神秘思想家がとる「沈黙」の中でも取り入れている。これはどんな宗派にもあってはまる「無対辞」の理念は生活の全盤において対辞を無くす「無対辞文化」の究竟の到達点であることを説こうとしたものであったと考えられる。

³⁵ 柳宗悦「凡人と救ひ」『PHP』第50号、PHP研究所、1956年9月。（『柳宗悦全集』第19巻、432頁。）朝鮮の焼物や妙好人の例を引いて、凡夫成仏の世界の存在を語っている。

³⁶ 「凡人と救ひ」、432頁。

4. 結論

以上、本論では柳の論考「無対辞文化」を通して近代日本の知識人の仏教意識に基づいている平和観の核心を探ってみた。彼は相克する対辞の世界において平和は得られないとみた。こうした考え方は対立相克を貫く普遍的な宗教理念(=不二)へと探求され、対辞概念を持たない「無対辞」によって統合された。その過程で得られた「無対辞」の実体、神(仏)は「知性」より「直観」によって体得されるもので、それは宗教的真理(=不二)と全一体となるものであった。にもかかわらず、彼が当時の知識人と異なった仏教理論を示したのは二元性の相互依存的な関係を「無対辞」の性質として捉えたことである。次第にそれは彼に「直観」を活かす「無対辞」の主体は人間の心であることを確信させ、「無対辞人」として浄土系の「妙好人」を再評価される研究を引くことになった。柳にとって「妙好人」とは平和を産みだす人であり、実際に生活の場で平和を実践する人であった。

また、彼の「無対辞」の理念は当時強勢であった近代産業(経済)や軍事(政治)を研究領域から避ける結果となり、日本中心のアジア諸民族への武力戦争を批判する根拠となった。彼はアジアの諸民族が独自の文化の自由性を持って互に助け合う調和の関係こそ「無対辞文化」の国家観だとみた。結局、彼は「無対辞」理念に依拠することによって、日本人としての平和観を確約させ、それを具体的な人間像、生活観、そして国家観として提唱することができたと指摘される。

この論考にこだわったのは、彼が直面した時代の課題と困難は、現在では一部の知識人だけの問題ではなく、私たち普通の人々の問題となっているからである。しかしながら平和の核心やその実践を試みた彼が、近代産業(経済)や軍事(政治)を研究領域から排除し、宗教や芸術に真の独立性の基礎があると感じていた点については今後さらに深く考察して行きたい。

<参考文献>

- ・柳宗悦、『柳宗悦全集』第2、4、6、10、16、19巻、1982年。
- ・——、『宗教とその真理』叢文閣、1919年。
- ・——、『宗教的奇跡』叢文閣、1921年。
- ・——、『宗教の理解』叢文閣、1922年。
- ・——、『神に就いて』叢文閣、1923年。
- ・——、『蒐集物語』、中央公論社、1957年。
- ・日本民芸協会編、『朝鮮とその芸術』春秋社、1954年。
- ・鈴木大拙著・上田閑照編、『新編 東洋的な見方』岩波文庫、1997年。
- ・西田幾多郎、『善の研究』岩波文庫、1950年。
- ・——、『西田幾多郎全集』第11巻、1988年。
- ・中見真理、『柳宗悦—時代と思想—』東京大学出版会、2003年。
- ・——、『柳宗悦とその時代(1)』『清泉女子大学人文科学研究紀要』17号1996。
- ・竹中均、『柳宗悦・民芸・社会理論—カルチュラル・スタディーズの試み』明石書店、1999年。
- ・水尾比呂志編者、『日本民俗文化大系6 柳宗悦』講談社、1978年。
- ・鶴見俊輔、『柳宗悦』平凡社、1976年。
- ・小熊英二、『＜日本人＞の境界—沖縄・アイヌ・台湾・朝鮮 植民地支配から復帰運動まで』新曜社、1998年。
- ・Brian Victoria: *Zen at War*, Weatherhill, 1997. 邦訳エィミー・ルィーズ・モザモト訳『禅と戦争』光人社、2001年。
- ・西井公成、『駒沢短期大学仏教論集』第7巻、2001。
- ・南博、『大正文化』到草書房、1965年。
- ・中村元他訳註、『浄土三部経』(上)、岩波文庫、1963年。
- ・阿満利磨、『法然の衝撃—日本仏教のラディカル』人文書院、1989年。
- ・末本文美士「内への沈黙は他者へ向かいうるか—明治後期仏教思想の提起する問題—」『思想』岩波書店、2002年。
- ・松村浩二、「『妙好人』論再考」『真宗文化』9、2000年。
- ・水上勉、「妙好人の世界」『新版水上勉全集』第13巻、中央公論社、1996年。
- ・寿岳文章、『柳宗悦 妙好人論集』岩波文庫、1991年。
- ・土井順一、『妙好人伝の研究—新資料を中心として』百蓮苑、1981年。

- ・『現代仏教講座』第4巻、角川書店、1956年。
- ・『在家仏教』第12号、1956年3月。
- ・『宗教研究』第78巻、2003年3月。
- ・『思想』第943号、2002年11月。
- ・『白樺』第8巻3号、第9巻9—12号、第12巻5号、第13巻9号
- ・『心』第14巻4号、1962年4月。
- ・『民芸』第109号、第110号、第111号。
- ・『読売新聞』、1920年5月9日。

湛然の事跡を伝える唐代資料

池麗梅<東京大学博士課程>

はじめに

第一節 湛然自身の著作に現れる記載

- 1.1 『摩訶止観科文』序
- 1.2 『法華文句記』に現れる湛然の五台山巡礼
- 1.3 蘇州開元寺「小石碑」

第二節 湛然滅後に成立した伝記資料

- 2.1 湛然の「臨終遺旨」
- 2.2 「国清寺智者大師影堂記」に見える湛然の「遺誠」
- 2.3 「荊溪大師碑」
 - 2.3.1 「荊溪大師碑」を取り巻く状況の分析
 - 2.3.2 「荊溪大師碑」の内容

おわりに

はじめに

我々の時代より千二百年も遡る遠い昔を生きた荊溪湛然(711-782)の生涯を精確に把握することは困難を極めるが、現存資料に基づいてその人物像を可能な限り丁寧に描出する試みは研究者の任務であり、湛然研究にとっては重要な第一歩となる。湛然の人物像を全体的に把握するには、『宋高僧伝』(988)を始めとする既存の伝記が便利であるが、八世紀を生きた湛然の生涯、事跡をより精確に理解するためには、さらに古い時代に成立した史料に基づく考証も必要